



TITLE:

小野先生の仕事と「雑談」

AUTHOR(S):

松野, 周治

CITATION:

松野, 周治. 小野先生の仕事と「雑談」. 経済論叢 1997, 159(3): 98-101

ISSUE DATE:

1997-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/45139>

RIGHT:

經濟論叢

第159巻 第3号

哀 辞

故小野一一郎教授遺影および略歴

異動をめぐる労使協議の変遷（3）……………久 本 憲 夫 1

「ブリティッシュ亜麻会社」の事業展開（2）…林 妙 音 19

児童労働に関する経済学的諸議論の検討……………石 井 一 也 34

中国のマクロ経済政策スタンスに関する
政治経済学的アプローチ：実証と理論……………鍾 非 54

1950-60年代日本自動車工業における
技術導入過程の史的数値分析（1）……………矢 野 剛 72

追 憶 文

小野一一郎先生の学風……………本 山 美 彦 94

小野先生の仕事と「雑談」……………松 野 周 治 98

学 会 記 事

平成9年3月

京 都 大 学 経 済 学 會

小野先生の仕事と「雑談」

松 野 周 治

小野先生が経済学部長を終え、1年間のイギリス留学から帰ってこられた1976年、大学院博士課程に進んでいた私は、先生の指導の下で「大上末広の略歴と著作目録について」（本誌第119巻，1977年）の作成作業に従事することになった。学部ゼミナール以来すでに5年以上にわたって接していたわけであるが、研究作品を仕上げる際は、日ごろの気さくでやさしい先生ではなかった。「松野君、この論文は〇〇巻〇〇号となっているが、本当にそうだろうか。発行月と号数が一致しない場合などもあるよ。」私は現物をもう一度チェックし、製本された雑誌の裏表紙を押し開け、「巻」ではなく「年」であること、号数もずれていることなどを発見することができた。先生は関係者に手紙を書き、面談をして事実を確かめ、「略歴と著作目録」は出来上がった。修士論文を書き上げ一息ついていた私は、どのような場合であれ研究にたいして持たなければならない厳格さと可能な限りの徹底性に接し、自らの姿勢を正すこととなった。

先生は、国際経済学が対象としなければならないヒト、モノ、カネの国家を越える移動のすべてについて取り組み、人口・移民問題、貿易、資本輸出、国際金融と貨幣問題、それぞれについて理論と政策、歴史と現状の研究を深めた。その際、分析と研究の対象として置かれていたのは、格差が存在し、支配従属関係が錯綜する歴史具体的な世界経済であった。「国際経済を研究する人間はナショナルな現実には敏感でなければならない。」こういう意味の言葉を先生から何回か聞いたように思う。こうした姿勢を私たちは、M. ドップ、H. ミントをはじめとする後進国開発理論と南北問題の研究（『後進国の経済発展と経済機構』1956年、『南北問題入門』1979年、『南北問題の経済学』1981年）、戦前戦後の日本資本主義研究その他、先生のあらゆる研究の背後に見ることができるよう思われる。

国際経済学の立場からの戦前日本帝国主義並びに戦後日本資本主義分析について、先生は数多くの論稿を私たちに残してくれた。

日本の貿易について先生は、『日本資本主義講座』第5巻（1953年）、『講座・日本資

本主義発達史論』第2巻(1968年),『新マルクス主義経済学講座』第5巻(1976年)などに収録された諸論文において全体的構造を,また,鉄鋼業(本誌第73巻,1954年)や紡績業(『日印綿業交渉史』1960年)との関わりで論じるとともに,関税問題その他を『経済評論』等の雑誌で扱っている。さらに,今日なお日本貿易史の通史としての地位を占めている松井清編『近代日本貿易史』全3巻(1959-63年)の刊行にも深く関わっている。資本輸出・对外投资については,『経済学講座』第3巻(1954年),『金融論講座』第4巻(1965年),『マルクス経済学体系』第3巻(1966年),松井清編『資本の自由化』(1970年)収録の諸論文などにおいて,資本輸出の動因をはじめとする理論研究と,日本の对外投资の実証分析が展開されている。

国際経済を構成する重要な要素にもかかわらず,分析が十分になされていなかった人口・移民問題についても,戦後の実態調査とともに(『ブラジル移民実態調査報告』1955年),戦前の歴史分析を行なっている(同報告所収「日本の移民問題」,『国際移住』第1号,1958年)。そして,日本の移民を取り巻く厳しい国際経済環境や,世界史上例を見ない「総引揚げ」を生み出さざるを得なかった背景など,移民現象に表われた日本経済の特殊性を明らかにしている。なお,『南北問題入門』に収められた「発展途上国と人口問題」において,戦後の世界の人口問題と関連する理論問題が検討されている。

しかし,小野先生がもっとも多くの論稿を残してくださったのは,日本の貨幣金融制度の国際的連関と,それを背景に展開された諸政策の本質の理解についてである。リカードや銀行学派の貨幣信用論の検討(本誌第70,72巻,1952,53年),国際金本位制からIMF体制の成立までの国際通貨金融制度に関する論理歴史分析(『講座信用理論体系』第3巻,1956年)などを背景にして,幕末開港に伴うメキシコドル流入から戦後の沖縄の通貨切替えにいたるまで,日本の貨幣金融問題と制度改革が国際経済学の立場から検討されている。

資本主義世界市場への包摂がもたらした日本へのメキシコドル(洋銀)の流入はいかなる事態を生みだし,幕府の対応(幣制改革)はどのような性格を持っていたのか(本誌第81巻,1958年),明治新政権の対応と銀本位制の最終的確立は,東アジアのメキシコドル体制の中で展開されつつあった「国際的通貨闘争=角逐」の中でどのような意味を持っていたのか(本誌第83巻および『近代日本貿易史』第1巻,1959年),資本主義形成期の日本の幣制を規定したメキシコドル体制はなぜ終焉を迎えたのか(本誌第89,90巻,1962年,『京都大学経済学部創立40周年記念経済学論集』1959年)。こうした諸点

が検討された上で、日本の金本位制成立過程が、政策決定に至る審議過程や、当局者の諸構想に関する内部資料の丹念な検討などを踏まえ、論じられる（本誌第92, 94巻, 1963, 64年）。これらの論稿を通じて、幕末開港以降金本位制成立までの日本の貨幣制度の変遷を規定した国際条件と、一面ではそれに規定されながらも、他面ではそれを利用して自らの経済発展と勢力拡張を図った日本の政策が明らかにされている。一連の過程は、従属から自立へと単純化できるものではなく、金本位制成立も含め、それぞれの歴史段階に規定された両側面をあわせ持つものであった。

日本の金本位制についてはその他に、金解禁に関連して、日銀の政策の検討（本誌第71巻, 1953年）と、野呂栄太郎の所説の検討を通じた動因分析が行われている（『近代日本貿易史』第3巻, 1963年）。また、第一次世界大戦後に金輸出禁止が継続された理由が、対中国投資政策とのかかわりで論じられている（本誌第98巻, 1966年）。

日本の貨幣制度の国際的連関についての先生の研究は、戦前だけを対象にしたものではない。戦後日本経済の復興と高度成長は、沖縄を日本の行政権から切り離し、米軍支配下に置くことと並行していたが、その過程で生じた円の消滅とドルへの切り替えの意味が検討されている（本誌第99, 100, 102, 109巻, 1967, 68, 72年）。沖縄のドル圏を傍らに置いた「円」、そうした戦後日本資本主義の姿が浮き彫りになっている。

以上に加えて、帝国主義確立期の対外移民政策（『世界経済と帝国主義』1973年）、第一次世界大戦後の対植民地政策（『両大戦間期のアジアと日本』1979年）、1920年代の対中国政策（『戦間期の日本帝国主義』1985年）など、それぞれの時期の国際経済環境の中で展開された日本の植民政策や対外政策が、当局者の政策思想や構想を手がかりにして分析されている。また、日本資本主義形成期の貿易政策が、金子堅太郎の構想をつうじてあきらかにされている（『国際流通とマーケティング』1992年）。

小野先生は「雑談」が好きだった。時や場所によって店は変わったが、ゼミや研究会の後には必ず「ちょっとお茶（実際はコーヒーであることが多かった）を飲みに行こうか」ということになった。それは私たちにとって大変楽しい時間であり、また勉強になった。時事問題、各自の勉強のこと、旅行の話など、題材にはこと欠かなかったが、どんな場合にも次から次へと人の名前と文献が出てきた。とにかく先生は本のことを良く知っていたし、知ろうとしていた。コーヒーの後には、もし時間があれば古本屋をのぞくのが、お決まりのコースであり、学会出張などの際は、必ず何軒かの店を回った。「どんな小さな店でも必ず何冊かは見るべきものがあるよ。」こう言って、時間の許す

限り本を見てまわった。

先生の「雑談」は周りの人間を元気にさせた。そのため私たちは特別の用がないときでも、幾度となく奈良のお宅にまでお邪魔をした。しかし「雑談」は、昨年10月27日に先生の病院をたずねた時が最後となってしまった。奥様からだいぶ調子が良くなったということを聞いてはいたが、先生が外出許可をもらい、近くの喫茶店で話をしようと言われた時は、いつも通りの様子なのですこし安心をしてしまった。先生の編集による貿易史の新しい論文集の最終的構成、京都大学世界経済研究室を中心とした研究会の再発足についての短い話以外は、先生が病床で読まれていた司馬遼太郎の話や、先生が引き続き進められていた阪南大学図書館の明治文献収集の話などを聞かせていただいた。30分くらいのつもりが1時間になり、さすがに見舞いにきた私たちの方から、今日はこれくらいでまた、ということになり喫茶店を出て、病院の門のところでお別れをした。

先生から新しい「雑談」を聞くことは、もうできなくなってしまったが、先生は私たちにたくさんの思い出と文章を残してくださった。